【教育振興支援助成報告】

マルチメディアを用いた地域連携のプラットフォームづくり
～家政福祉を基盤とした保育士養成～

教育振興支援助成成果報告

弓削田綾乃、丸谷充子、佐藤有香、二宮祐子、池谷真梨子、大沼良子*、庄司妃佐*

Constructing a platform collaborated the community by using multimedia
～ Training of childcare workers based on home economics and social welfare ～

YUGETA Ayano, MARUYA Mitsuko, SATO Yuka, NINOMIYA Yuko, IKEYA Mariko,
ONUMA Yoshiko, SHOJI Hisa

要旨

本稿は、和洋女子大学家政学部家政福祉学科児童福祉コースが2020年度から3年計画で取り組んだプロジェクトについての成果報告である。本コースの特徴の一つに、家政福祉の多彩な学びを基盤とした保育士養成があげられる。そこで、これを踏まえたプログラムを計画し、取り組んだ。具体的には、専門科目の学びを活かし、学生主体で地域交流の場を創り上げていくことを目指した。その実現のために、年度ごとの課題を定め、マルチメディアを用いた双方向型授業かつ複数科目で連携する学びのプログラムを構築した。

１年目は、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の影響を受け、授業に関わる課題を変更し、タブレット型情報端末を整備して「ICTを活用した双方向授業づくり」と、それによる「ICT技術とディスカッション能力の向上」に取り組んだ。

２年目は、「科目間の連携」「インクルーシブな身体表現の創造」「映像コンテンツの制作」を主たる活動と位置づけ、影絵劇の制作とコンテンツづくりに挑戦して発表した。

３年目は、子育て支援イベントとして「つながる・つなげるプロジェクト　親子で参加　あそぼう・はなそう会」開催に向けた取り組みを進め、全５回を実施した。

課題への取り組みについては、必ずしも当初の計画通りには進まない中で、マルチメディアを活用しながら、年次・科目をまたいで課題に取り組むという目的を遂行できたと考える。今後の展望としては、子育て支援プログラムとして、継続的実施を可能にするための運営方法を確立すること、授業の一環として継続するとともに、学生による見通しをもった活動を展開すること、家政福祉の多様な学びとICTを活用することがあげられた。

キーワード：家政福祉の学び、保育士養成、マルチメディア、地域連携のプラットフォーム

和洋女子大学 家政学部 家政福祉学科
＊2022年度まで上記学科に所属

１．はじめに

和洋女子大学家政学部家政福祉学科では、2019年度に保育士養成課程である児童福祉コースが設置された。家政福祉学科で展開してきた学びとは、豊かで安心できる社会の創造をめざして、衣・食・住、社会福祉、家族・消費生活、そして保育についての体系的かつ包括的な学びである。こうした学びの特性を、保育士養成の場にどのように結びつけられるのかという命題に、児童福祉コースは常に向き合ってきた。

このような状況を踏まえて、設置２年目の2020年度に、「マルチメディアを用いた地域連携のプラットフォームづくり～家政福祉を基盤とした保育士養成～」というプロジェクトを立ち上げ、2022年度までの３年計画として取り組んだ。このプロジェクトを通して、児童福祉コースに在籍する学生の一人一人が、保育の実践的な学びを深めるだけでなく、保育・福祉・家政の有機的なつながりを実感できることを目指したのである。本稿は、和洋女子大学教育振興支援助成を受けた本プロジェクトを年度ごとに振り返りながら報告し、今後の展望についても提示したい。

なお、本プロジェクトに関しては、「和洋女子大学紀要」（2021、2022）[1] と、日本保育学会大会（2022、2023）[2] で、中間報告をした。また、本課題は、和洋女子大学の「人を対象とする研究審査」での承認を受け、実施した（承認番号：2212）。

２．プロジェクトの目的と方法

家政福祉学科が提供する学びの内容には、家政・福祉・保育という複数の領域が含まれるため、学生によっては何を学んでいるのかわからなくなったり、進路に迷ったりする事態を生じさせる恐れがあった。そこで、児童福祉コースでは、保育を柱とした家政福祉の多彩な学びを有機的につなげる体系的かつ体験的な教育プログラムを設置したいと希望するに至った。これが理念となり構想されたのが、「児童福祉コースの学生が主体となって、多様な人たちが輝ける場のプラットフォームを、マルチメディアを活用しながら構築していく」という本プロジェクトであった。

立案にあたって重視した点は、学生の主体性、科目間の連携、創造的活動、地域の方々との交流等である。そして、その方法の一つとして、マルチメディアに着目した。情報端末やICT（情報通信技術）等を活用することで、情報の収集・整理・共有、双方向授業、科目間の連携、コンテンツ制作等を効率的に進められると考えたのだ。以上の取り組みを通して、学生一人一人が、家政福祉の学びを統合させ、保育士の資質に関わる能力が育まれる教育効果を期待した。

３．1年目――2020年度の取り組み：新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の影響による計画の変更

2020年度は、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の影響を大きく受けた。特に前期はほぼ遠隔授業となり、学内での集合活動は実施困難となった。後期は、必要に応じて対面授業が実施されたものの、本活動で想定していた科目の多くは遠隔授業となった。そこで、主に次の２点の計画を変更し、取り組んだ。

１つ目は、授業に関わる課題の変更である。科目間の連携が難しくなったことを踏まえて、「ICTを活用した双方向授業づくり」と、それによる「ICT技術とディスカッション能力の向上」を当面の課題として、教員が個々に可能な範囲で取り組んだ。

２つ目は、マルチメディアの活用に関わる変更である。当初の計画であった、数人で１台のタブレット型情報端末を共有して作業することが、感染症対策の観点から難しくなった。これを受けて、利用可能なタブレット型情報端末の購入台数を増やし、次年度購入分とあわせて、できる限り共用せずに済むように

した。また、情報流出に留意しながら、各自のスマートフォンとの併用も試みた。

こうした状況下で、学内で使用するクラウド型教育支援システム（manaba）やWeb会議システム等の各種インターネット上のシステムやコンテンツを活用する機会が格段に増えた。その結果、学生と教員の双方において、マルチメディアの活用に必要な技術と情報リテラシーの向上が図られたと考える。

４．２年目――2021年度の取り組み：影絵劇の取り組み

4－1. 課題の設定

2021年度は、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の状況が好転しない中、対面授業での身体接触やグループワーク等の実施が難しい状態が続いた。そこで、前年度からの課題であった「科目間の連携」「身体表現の創造」「映像コンテンツの制作」を主たる活動と位置づけ、取り組んだ。まず児童福祉コースの１期生であった３年生は、前期の保育士資格必修科目「障害児保育Ⅱ」と「保育内容の指導法B」において、障害の特性やインクルーシブについて学び、障害の有無にかかわらず共に楽しめる身体表現を模索し、影絵劇の制作とコンテンツづくりに挑戦して、10月末に和洋女子大学大学祭の里見祭（以下「大学祭」と記載）で披露した。また２期生となる２年生は、前年度に１期生が取り組んだ内容を踏襲しつつ、対面授業を中心に課題に取り組んだ。

連携する科目の担当教員間では、ICT上で情報共有・データ共有し、授業内容に反映させるようにした。また、2021年度もタブレット型情報端末を追加購入し、整備および活用を進めた。

4－2. 科目間連携の取り組み例

影絵劇の創作を軸として、科目間でどのように連携したのか、１期生（児童福祉コース３年生）の取り組みを例にとり、詳細を紹介する。１期生は、前年度の２年次に、「保育内容　表現」において身体表現や造形表現について学び、影絵劇の原作となる物語を創作した。また「障害児保育Ⅰ」において、様々な障害についての基礎的な学びを深めた。さらに「こどもの生活と遊びD」において、ストーリー性のある表現の在り様について学んだ。これらの科目は遠隔授業中心であったものの、翌年度の活動につながる学びとなった。

３年次の「障害児保育Ⅱ」では、２年次の「障害児保育Ⅰ」での学びを基に、実践的な学びへとつなげた。具体的には、障害の有無にかかわらず、誰もが個々の違いを認め合いながら共に成長するインクルーシブ保育の学びを深めるための、聴覚障害児と健常児が共に楽しめる歌や踊り等の集団活動を考えた。授業方式は遠隔での実施となり、進め方は次の通りであった。

まず各自がインターネットなどを使って障害のある子どもたちの遊びや活動に関する映像や文献などを情報収集し、共有した。次に、３～5歳児を対象に、５～10分程度の集団活動案を考えて共有し、他の人の活動案を見て学び、感想を述べ合い、さらに工夫を重ねて各自の活動案を完成させた。インクルーシブな身体表現活動のまとめとして、「保育内容の指導法B」で制作する影絵劇を対面で行う場合を想定して、聴覚障害のある乳幼児と保護者に対する配慮を考えた。

この学びを実践につなげる授業が、「保育内容の指導法B」であった。この授業では、乳幼児期の発達に即して深い学びが実現する過程を理解し、具体的保育場面を想定した保育の構想、指導方法について学んだ。授業の後半では、実際の保育場面で子どもたちが「影絵劇の活動」を行うことを想定し、計画立案・実施・評価・省察を通して保育を構想し、指導する方法について学修を進めた。ここでは、「全ての子どもが楽しめる」という視点から、影絵劇を上演するまでの過程を考え、創作に取り組んだ。そこには、「障

害児保育Ⅰ・Ⅱ」での学びも取り入れられていた。

題材は、２年次に「保育内容　表現」で創作した「クラゲの物語（少女が、クラゲに導かれて海の世界を冒険する物語）」である。一連の活動の中で、学生が、スケジュール管理・庶務・取りまとめ等、各自役割を担い、ＩＴ上で情報共有・意見交換を行いながら進めた。また、影絵劇で使用するモノの製作にも取り組み、特にスクリーンや衣装等は、被服学で習得した技術を活用する様子がみられた。

この授業で完成させた影絵劇は、動画撮影・編集をおこない、10月末の配信型の大学祭で、映像コンテンツを配信するに至った。ここまでの一連の取り組みを整理すると、図１のようになる。２年目の取り組みでは、複数教員による科目間の連携と、学生が主体的に取り組み、成果を発表することが実現したといえよう。

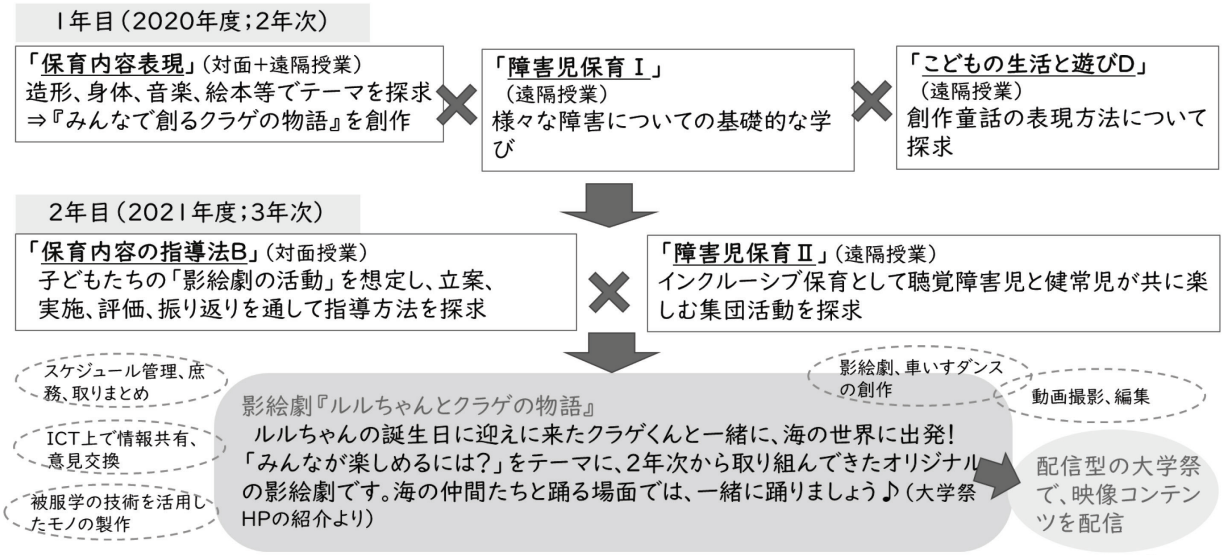

図１．影絵劇の取り組み（１期生）

５．３年目――2022年度の取り組み：子育て支援イベントの計画と実施

5－1．課題の設定

2022年度になり、感染対策に留意しつつ地域の方たちとの交流が可能になった。そこで、和洋女子大学内での子育て支援イベントを計画し、取り組みを進めた。

保育士養成のプロセスにおいて、親子と直接関わり合う経験は、通常の実習とは異なる体験になることが予測された。そこで活動のねらいを、「地域の未就学児・保護者らと交流する場を学生主体で企画し、実施する。そして一連のプロセスの成果と課題を検証する」ことと定めた。具体的には、以下の２つがあげられる。

１つ目は、未就学児と保護者らの交流の場を形成するにあたって、保育を学ぶ学生や教員らがどのように介入していくことが望ましいのかを探ること。２つ目は、本活動が、保育士の学びにどのように影響するかを探ること。これらによって、地域社会への貢献を目指すとともに、保育士養成における取り組みの意義を検討していった。

5－2．イベントについて

イベントの名称を「つながる・つなげるプロジェクト　親子で参加　あそぼう・はなそう会」と決め、

2022年度に５回開催した。参加者は近在の未就学児（３歳以上児と弟妹）と保護者とし、実施場所は和洋女子大学内の南館プレイルームとした。実施時間は、基本的に各回１時間30分程度とし、10月末の大学祭においてのみ、大学祭の開催時間にあわせた。

会場内には、自由に好きな遊びができる複数のコーナーを設置した。また、乳児向けのコーナーも設置した。それぞれのコーナーが混在しないように、カラフルなウレタンマットを敷いてコーナーごとの区切りをつけた。学生は、実習時と同様にエプロンをつけ、清潔で安全な身だしなみで臨んだ。なお、授業間の連携においては、おもにクラウド型教育支援システム（manaba）や定例会議での報告等を活用した。

外部からの参加は予約制とし、大学ホームページ、自治体の子育て支援課、地域の子育て支援事業者等の協力を得て募集した。なお、感染症対策として、事前の健康観察、受け付け時の検温と手指消毒、玩具・用具等のこまめな消毒と換気などを行った。また、当日は学内の保健部署の支援を仰ぐとともに、学外者対象の短期保険に加入し、傷病発生に備えた。さらに、大学への諸届、駐車場と待機場所の手配等は、教員・助手が担った。各回の取り組み状況は、表１の通りである。

表１．各回の取り組み状況

	第1回 7/2	第2回 8/20	第3回（里見祭）10/29･30	第4回 12/10	第5回 2/18
対象授業	保育者論、子育て支援、保育内容表現	なし	保育実践演習、こどもの生活と遊びD、保育体験演習、保育内容環境　等	こどもの生活と遊びD、保育実践演習、保育体験演習	なし
学生	4年生19人、2年生全員（準備）	4･3･2年生10人	4･2･1年生45人	2･3年生8人、4･1年生全員（準備）	4･2年生12人
教員･助手	7人	6人	6人	4人	4人
学生の役割	環境構成、パネルシアター、手作り玩具の教材づくり、子どもの見守り、保護者への聞き取り	環境構成、手作り玩具の教材づくり、身体表現あそび、お絵描きあそび、子どもの見守り、保護者との歓談	環境構成、パネルシアター、手作り玩具の教材づくり、迷路コーナーの運営、子どもの見守り	環境構成、手作り玩具の教材づくり、ハンドベル演奏、子どもの見守り、保護者との歓談	環境構成、手作り玩具の教材づくり、身体表現あそび、子どもの見守り、保護者との歓談
備考	子ども一人に学生一人が付き添うと同時に、保護者から育児の実情について話を伺った。	夏季休暇中だったため、希望学生のみの参画となり、授業での取り組みはなかった。	大学祭での開催だったため、参加者は自由に出入りする状況だった。テーマをハロウィンとし、各学年で出し物を決めて取り組んだ。	テーマはクリスマスとし、2年生中心に企画･運営した。会場装飾は、1･4年生の授業で担当した。	後期授業終了後だったため希望学生のみの参画となり、授業での取り組みはなかった。

5－3．参加した保護者の感想

保護者の方々には、各回の事後アンケートへの協力を仰いだ。その結果を整理する。

①自身の子どもへの気づき

自身の子どもに対しては、「人見知りしない」「親以外の大人とも遊ぶことができる」「かまってもらえるとにこやか」や、逆に「集団では気後れして参加できない」などがあげられていた。また、「自分のやりたいことを主張できる」ことに気づいたという回答もあり、子どもへの気づきがあったことがうかがえた。

②学生の対応について

「自然な声かけ」「安心感」「笑顔で温かい接し方」「子どもと同じ目線」など、学生の子どもへの関わり方が安心感につながったことが読み取れた。また、「子どもの意思を尊重したコミュニケーション」「子どもに対する肯定的な関わり」など、子どもの個性や態度が受け入れられたことが信頼の元となったことがうかがえた。

③保護者自身について

「子どもと距離をもてた」「リラックスできた」「下の子をみてもらえたので、上の子についていられた」

「大人と話せた」といった感想からは、本活動が保護者の心理的な支援になったことがうかがえた。

④保育の学びとの関連

「保護者の子育てに対する考えや環境に興味を持ってくれた」「保育の仕事などに向けて頑張っている様子が聞けた」「子どもの実態や様子をわかってくれる」など、保育士養成課程を踏まえた取り組みであることに理解を示し、評価する声が聞かれた。また、教員との関わりについても触れられており、「専門的な話を聞ける」「相談できる」ことへの期待があることがわかった。複数回の参加者からは、継続的・定期的な実施を求める声もあがっていた。なお、予約方法や諸連絡等、運営に関する評価もあった。

以上から、子どもと学生の関わりに接することで、自身の子どもに対する気づきが促進されたことがわかる。また、家族で遊びに行き、学生や教職員、他の参加者らと交流しながら各自の楽しみ方で過ごせる場となっていたことも指摘できる。しかしながら、家政福祉学科ならではの内容の工夫や、教職員と保護者との関わりなどに関しては、今後の課題だろう。

5－4. 学生の感想

次に、参加した学生の振り返りを整理する。

①子どもへの気づき

子どもに関しては、一人一人の個性の違いへの気づきと、その対応と影響についての感想があった。たとえば、「パネルシアターや手遊びに興味を示す子もいればお気に入りの玩具で遊び続ける子もいたりと、その姿は様々だった。興味を示しながらも行けずにいる子もいたため、子どもの様子を見て、その子の気持ちに寄り添った関わり方をすることが大切」「保育者の言葉がけやリアクションで、子どもの新たな一面を発見することにつながる」など、一人一人の行動を見守ったことでの気づきがあったといえよう。

②保護者への気づき

保護者とコミュニケーションをとったことによる、子育ての当事者への思いがあげられていた。たとえば、「子どもとの関わりの中で疲れを感じる現状があると知った。忙しい日々の子育ての中、少しの時間でもリラックスできる、息抜きができる時間があることは大切」「２人以上子どもがいる保護者にとって、上の子との関わりをじっくり持つために下の子を誰かに見ていてもらうことが必要」など、子育ての喜びや葛藤、率直な思いを知り、現状と課題に考えが及んだことがうかがえた。

③親子の関わりについての気づき

親子のあり方についての気づきもあった。たとえば、「子どもは親の見守りの中で安心して遊びに集中することができ、親はのびのびと遊ぶ子どもの姿を見ることで安心する」「子どもたちが楽しそうに遊ぶ姿を見ていられることは、保護者にとって嬉しいこと」など、保護者と子どもの関係性を実感として感じ取っていた。

④今後について

その他にも、学年を超えた協働による学びや、子ども・保護者に対する教職員の関わり方からの学びなどがあげられていた。また、今後も主体的・継続的に関わっていくことへの前向きな意見も散見された。

以上のように、子どもと保護者の自然な姿に触れ、新たな気づきを得たことによって、各自が学んできた知識と技術を顧み、深化させる機会になったと考えられる。また、学年を超えて協働する活動が、学びの経験に応じた有意義な連鎖を生み出していると考えられた。「参加してよかった」「また参加したい」という感想だけでなく、これからの活動に主体的に関わろうとする意欲が醸成されていたと考えられる。

６．まとめと展望

ここまで、家政福祉学科児童福祉コースで2020年度から３年計画で取り組んだプロジェクトについて概説し、成果を振り返ってきた。最後に、まとめと展望を示したい。

課題への取り組みについては、必ずしも当初の計画通りには進まない中で、マルチメディアを活用しながら、年次・科目をまたいで課題に取り組むという目的を遂行できたと考える。

地域連携のプラットフォームという観点からは、試行錯誤の末、活動の土台を構築できたと考える。子どもにとっては、遊びの場だけでなく、親以外の大人と関わる場になっており、保護者にとっては、子どもへの気づきが促されるとともに、心身の休息、育児に関する相談と情報共有の場になっていた。また、学生の未熟ながらも真摯で謙虚な姿勢は、子どもと保護者にとっての安心感につながっていたと考える。

学生にとっての保育の学びという観点からは、とりわけ最終年度の子育て支援イベントに関わる一連の取り組みが、体験を通した学びとなっていたことがうかがえる。責任をもって子どもと関わり、家族の自然な姿にも触れられる貴重な機会であったと同時に、知識とのズレを認識し、新たな学びの意欲につながる場になっていたことが指摘できよう。また、学年を超えた協働を体験でき、学生の主体性・創造性等の育成へとつながったと考える。

今後にむけての展望としては、次の３つがあげられる。①子育て支援プログラムとして、継続的実施を可能にするための運営方法を検討すること、②授業の一環として継続するとともに学生による見通しをもった活動にすること、③家政福祉の多様な学びとICTを活用することである。2023年度からは、引き続き児童福祉コースの取り組みとして、子育て支援イベントの充実に焦点を当てたプロジェクトを展開している。本プログラムが、家政福祉学科児童福祉コースの財産となるよう、今後も取り組んでいきたい。

脚注

1）・弓削田綾乃・丸谷充子・佐藤有香・大沼良子・庄司妃佐・二宮祐子・池谷真梨子・飯村愛、マルチメディアを用いた地域連携のプラットフォームづくり１～家政福祉を基盤とした保育士養成～、和洋女子大学紀要、2021、第63集、p.199-204.

・弓削田綾乃・丸谷充子・大沼良子・庄司妃佐・佐藤有香・二宮祐子・池谷真梨子・飯村愛、児童福祉コースによる地域連携プロジェクトの取り組み～マルチメディアを用いた地域連携のプラットフォームづくり２～令和２（2020）年度～和洋女子大学教育振興支援助成中間報告、和洋女子大学紀要、2022、第64集、p.275-283.

2）・弓削田綾乃・丸谷充子・佐藤有香・大沼良子・二宮祐子・池谷真梨子・飯村愛、家政福祉学を基盤とした保育士養成の取り組み―コース設置３年の報告と展望―、日本保育学会第75回大会、2022年５月15日（ポスター発表）

・弓削田綾乃・大沼良子・丸谷充子・佐藤有香・庄司妃佐・二宮祐子・池谷真梨子・飯村愛、地域活動につなげる保育士養成の取り組み―家政福祉の学びを基盤として―、日本保育学会第76回大会、2023年５月13日（ポスター発表）

弓削田綾乃（和洋女子大学 家政学部 家政福祉学科 准教授）
丸谷　充子（和洋女子大学 家政学部 家政福祉学科 教授）
佐藤　有香（和洋女子大学 家政学部 家政福祉学科 教授）
二宮　祐子（和洋女子大学 家政学部 家政福祉学科 准教授）
池谷真梨子（和洋女子大学 家政学部 家政福祉学科 助教）
大沼　良子（和洋女子大学 家政学部 家政福祉学科 前教授）
庄司　妃佐（和洋女子大学 家政学部 家政福祉学科 前教授）

（2023年11月14日受理）